

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

1. 日時：2015年7月11日（土）14:00-17:10
2. 場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディア会議室(304)
3. 内容
 - (1) ソ ミンジョン（東京外国語大学大学院生）「大邱方言におけるアクセント類型によるピッチの実現」
 - (2) John WHITMAN（AA 研共同研究員，国立国語研究所）「朝鮮語史における声調の起源、今と昔（“Tonogenesis in Korean then and now”）」

大邱方言におけるアクセント類型によるピッチの実現

東京外国語大学博士後期課程

ソミンジョン

本研究では、韓国語大邱方言の2音節語の発話を対象とし、アクセント類型によるピッチの実現に如何なる特徴があるかを考察することを目的とする。韓国語の大邱方言は、語の音節ごとに2段階の音の高さ(H/L)の決まりがある、高さアクセント方言であり、2音節語のアクセント類型は、H:H, HH, HL, LHの4つである。今回の研究では、HH, HL, LH類型のみを対象とし、発話実験を行った。発話実験に参加したのは20代の母語話者の女性3名である。単語選定においては語頭分節音の影響を考慮し、母音・鼻音及び破裂音と破擦音の平音から始まる単語と、破裂音と破擦音の激音・濃音及び摩擦音から始まる単語を区別して選定した。

測定したピッチの高さと音節の長さでピッチを類型化した。その結果、音節の内部で、開始部から終止部までピッチが上昇する上昇型、下降する下降型、またピッチの変動幅が大きい、水平型、最後に音節内部でピッチの変わり目(turning point)がある、屈曲型に分類することができた。HHとHLアクセント類型の第1音節のH-toneのピッチを類型別に見ると、ピッチ類型によって、音節開始部のピッチ値に大きい差があり、これは語頭分節音の影響と考えられる。語頭分節音が母音・鼻音及び平音から始まる単語の開始部のピッチより、激音・濃音及び摩擦音から始まる単語の開始部のピッチが高く、これはピッチの類型に関わらず、一貫して同じ結果を示した。また、激音・濃音及び摩擦音から始まる単語の場合、下降型の数が大きくなることから、語頭分節音の種類によって、ピッチ類型も影響を受けると考えられる。これに対し、LHアクセント類型を見ると、激音・濃音及び摩擦音から始まる単語の開始部のピッチが、母音・鼻音及び平音から始まる単語の開始部のピッチより高い結果は、HHとHLの結果と同様であるが、ピッチの類型は下降型の数が多く現れた。これは第2音節のピッチの上昇のために、第1音節のL-toneでピッチを下降すると説明できる。

最後にHHとHLアクセント類型の第2音節が、全て下降型のピッチ類型で現れることから、HHとHLを区別する違いは何かを見るため、ピッチレンジについて考察した。HHの第2音節のH-toneの内部でのピッチレンジは、HLの第2音節のL-toneの内部でのピッチレンジと有意な差はなかったものの、単語全体のピッチのピックから単語の終止部まで下降するピッチレンジは、HHよりHLの方が大きく、有意な差があるという結果が出た。

朝鮮語史における声調の起源 (tonogenesis)、今と昔

John Whitman (国立国語研究所)

本発表ではまず、東北アジアにおける喉頭素性 (laryngeal features) と韻律素性 (prosodic features) の分布について概観し、声調起源 (tonogenesis) の典型パターンとして、中国語の例に関して検討した。続いて、現代韓国語ソウル方言において進行中の声調起源の有様についてまとめる一方、朝鮮祖語の声調起源に関する考察を行った。更に、もう1つの可能性として、北海道アイヌ語の声調起源に関する仮説を紹介した。